

## 吉原先生履歴

明治 36 年	徳島県穴喰町に生まれる。 (家業：靴下の製造) 15 歳で父逝去 高等小学校卒業後大阪四ツ橋で丁稚奉公 水道局事務員 帝国通信社大阪支局で給仕の傍ら関西大学専門部に通学 海外電報電信、工業新聞勤務の傍ら YMCA、自彊学館へ通学
大正 12 年	上京し吉林医院薬局に勤務
大正 13 年	鳥取県立中入学
大正 14 年	第一臨教（高等師範付設）中等教員免状を得る。
昭和 4 年-11 年	山口県立柳井中学教員
昭和 11 年	東京文理大学入学
昭和 14 年	台湾総督府台中師範学校 国語教員
昭和 21 年	府立寝屋川高等女学校 -昭和 23 年共学制になる-
昭和 23 年	府立三島高校
昭和 33 年	府立四条畷高校
昭和 34 年	府立阪南高校新設のため四条畷高校校長兼務阪南高校事務扱いとして勤務、その後校長となる。
昭和 40 年	生徒数 150 人、教師 9 人、阪南中学校舎に間借
昭和 41 年	寝屋川市教育委員長
昭和 52 年	勲四等旭日小綬賞



## 大阪府立阪南高等学校の思い出



昭和34年4月、住吉・西成・阿倍野区民多年の熱望に応じて、阪南高校が阪南中学校舎の一部を借りて誕生した。全・定・分校と3つの所帯を有した大規模暁高から生徒150人先生9人の阪南に移った時、私は心中の寂しさを感じずにはいられなかった。

しかし将来に大きな夢を託し、この一粒の麦を大切に育てようと決心した。

校章は富津の富田先生にお願いして、高の字の無いユニークな、すばらしいものを作っていた。校歌は後に新校舎移転後、私が作詞をして、作曲を平井康二郎氏にお願いした。校歌もできた。生徒会もできた。PTAの会長に杉野林之助君を得られたことは幸だった。第一期と第三期の会長をお願いして、阪南の育成に並々ならぬご努力を頂いた。すばらしい名会長だったが、残念ながら3年前急逝されて今日そのお姿を見ることはできない。

はじめ、中学と相住まいすることになった時、中学のPTAには高校生からの被害を心配していたが、いざ蓋を開けてみると高校生の規律の厳正なのに驚いて「高校生を見習え」と中学生を指導するという事になった。私も全生徒を知るために授業をした。今にして思えば、仮校舎でその基礎は固まったと言ってよい。35年4月、庭井町の現校舎に移転する。中央8m廊下での生徒の歓喜の叫びは、いまだに耳底に残る。



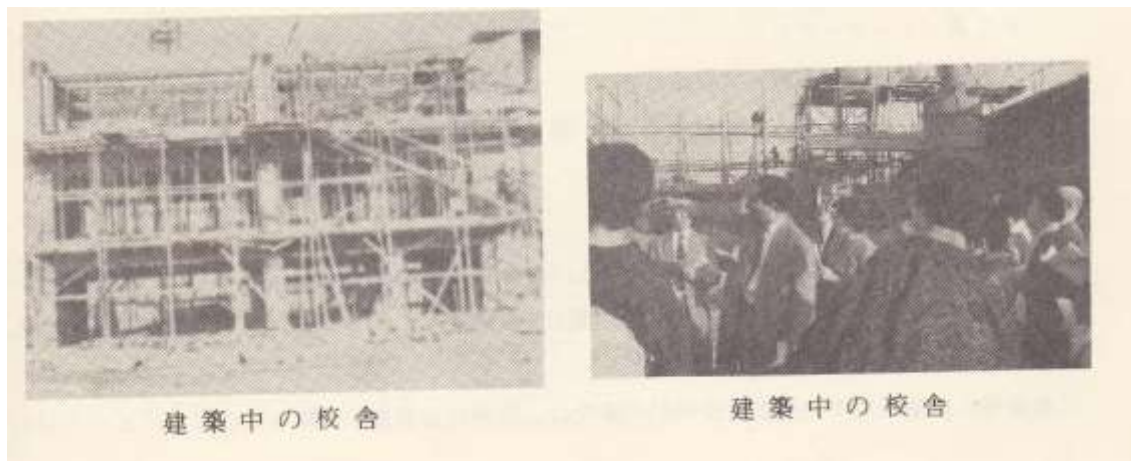
### I. 阪南校舎

浜田教育長は、建築上、大阪に特色のある学校を造りたいと念願し、普通は府の建築部で設計するのを、日本建築家協会会長坂倉準三氏に依頼した。坂倉氏は東帝大美学科卒後、フランスのコルビュジエに師事した日本一流の建築家だった。こういう関係から、阪南校舎の近代性は、コルビュジエの建築理念によるところが多いのである。コルビュジエは1922年の頃、「近代建築の五原則」(Les 5 points de l'architecture nouvelle)を発表したが、それは、「1.ピロティ 2.屋上庭園 3.自由な平面 4.連続窓 5.自由なファサード」である。

阪南校舎と比較してみると、随所にこの五原則との関連がみとめられる。しかし学校建築とい枠内では、この五原則をそのまま適用することが、困難な点もあり、設計だけして、実施に至らなかったものもある。とにかく余りにも型破りの設計だったために、設計者と府教委との間に立って、調整に苦労したことも真繰り返し多々あった。その中、建築部と坂倉君と意見が対

立しても難航したのは体育館の設計であるが、ここで詳説することもできない。阪南の新建築は全国に喧伝され、私の在任中、見学者は3千人を越えた。設計の段階で、参考のために私は北陸・関東東海と特色のある校舎・体育館を視察調査した。校舎の第1期完成の段階では、参観者に説明の必要もあって、泥縄式に建築に関する文献を渉猟した。

「読売新聞」所載(昭和37年12月25日)の参観記事の一節に、次のような記事がある。



さらによく見ると、校長室をはじめ教員室、事務室、保健室などがいずれも2階に集っていることに気づく。第2校舎は全校舎(3むね)の中央にあり、2階は3階建ての校舎のやはり真ん中である。つまり校内のどこからでも行き易いところだ。市役所や公会堂がふつうの都市の中心部に置かれるように学校でも校長室、教員室、事務室、特別教室などみんなに関係のある部屋は中心部に置くべきだという、新しい考え方によるもので、吉原校長はこれをコア(核)プランと呼んでいる。

さらに、驚いたことにはここでは正面玄関までが2階(第1校舎)にある。正面からの道はゆるやかなスロープで正面玄関につながっている。これもコア・プランに基づく独特の構造である。

もう1つの特徴は、管理部門の部屋が中心になった2階のほかは廊下がないことである。その代わり1・2・3階を結ぶ階段が数多くあり階段の両側に教室がある。ちょうど団地の鉄筋のアパートと同じような構造で、これはクラスター(群・房)・プランと呼ばれ、イギリスの学校建築はほとんどこの方式になっているが、日本では非常に珍しいという。

クラスター・プランの利点は教室の横に廊下がないため騒音が少なくなることと、廊下のスペースが浮いてくることで、阪南高校ではこのスペースを活用して、各ホームルームの横に全生徒が利用できるロッカールームを併設している。

このように府立高校として全く特異の校舎を誇っているのは、去る昭和34年創立のとき、府教委が近代建築によるモデル・スクールにするため、とくに近代建築家として名高い坂倉準三氏に設計を頼んだからだ。それまでは府立高校の設計は府建築部営繕課で全部やっており、民間に依頼したのは、このときが初めてだった。近代建築の巨匠としてフランスで名高いコルビュジェに学び、鎌倉の近代美術館や東横ホールを設計した坂倉氏は阪南高校の建築にも情熱を

こめ、構造上の近代化だけでなく、理科室は寒色、音楽室は暖色というように色彩調整にも、旭高校の場合より一段と思いきった配色をした。これだけぜいたくな出来映えなのに、廊下などの”ムダ”をはぶいてあるため、建築単価はふつうの高校と変わらないのがまた自慢のタネだ。

「国際建築」(1960年 10月)の目次を見ると

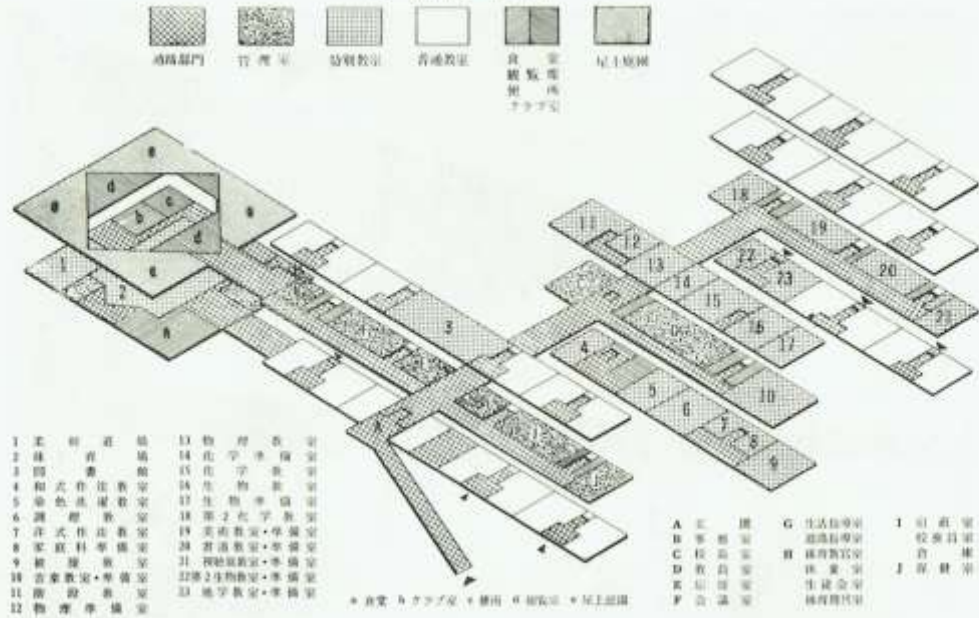
近代建築の空間性	ミースvdローエとル・コルビュジェ 長谷川仰堯
ネッスル総本社・レマン湖畔	ジャン・チュミ設計
展望塔・ロッテルダム	ジャン・グアン・ダイン設計
大阪府立阪南高等学校。大阪市住吉	坂倉準三研究所大阪支所設計
僧院ラ・ツレー。リヨン近郊	ル・コルビュジェ設計
ダラス劇場・テキサス	フランク・ロイド・ライト設計

世界的建築家の設計した著名な建築に伍して、阪南校舎が挙げられている点に、阪南校舎が旧来の学校建築の型を破った画期的な近代建築の先駆者として、専門家によって認められていることがわかるのである。

坂倉準三建築研究所大阪支所長西沢文隆氏は、阪南校舎建築の構想を次のように述べておられる。

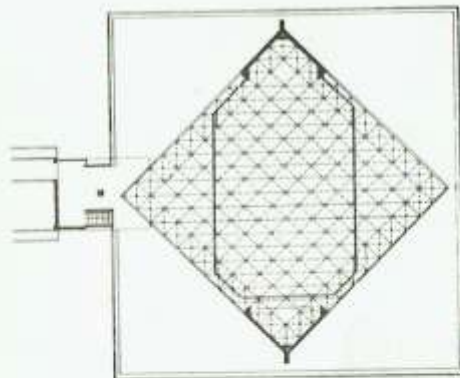


校舎配置図 (2)



校舎配置図

カテナリー原案 (3)



体育館断面図 (4)

